慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	釈元政の文学における心と狂：一つの近世日本公安派文学序説ならびに論
Sub Title	A study of Shaku Gensei
Author	林, 左馬衛(Hayashi, Samae)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.146- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・ 中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

釈元政の文学における心と狂

――一つの近世日本公安派文学序説ならびに論――

林　左馬衛

『艸山和歌集』④の冒頭歌に、

春たつこころを

こほりゐし野中のしみづうち解けてもとの心にかへる春かな

とあり、集中（一五〇首の中）に二一首、「心」ということばを使用した作例がみられる。なかんづく、

身をさらぬ心を友と定めずば猶もすむべき山のおくかは

こころにも及ばぬものは何かある心にとへば心なりけり

の二歌は、この撰者が、毎日を「心」とむき合って暮していた人物であった――という事実をおのずから表白している和歌としてみる

上でも、顕著な作物とみとめることができようか、と思う。当然のことながら――、日本文学の伝統は、この作者の深いところでいきづいていたのだ。

撰者釈元政[1][2]（深草の元政上人の名で、もっともよく知られている）は、日蓮宗の僧である。したがって、「こころ」をみつめた結果もどってゆくべき「こころ」のよすがを、この宗門における宗教的体験にもとめ、深く自得するところがあった筈だ。他宗門の僧や俗界の文人とくったくない交歓ができたことは、その自信を裏書きするものであった、と考えたい。集中に、

たのもしなあまねきのりの光には人の心のやみものこらじ

という作歌がある。

和歌を誌すにあたって、元政は、「心」と「こころ」を書きわけているとは思えない。その「こころ」は、ときに浅く、ときに深くとらえられているが、記述者としての元政は、そのさまざまな心を、ときに「こころ」、ときに「心」と配字し去った、と考えてよい、と思う。和歌の世界の人としての元政は、どこまでも、和歌の世界の人として終始していたのであろう。

その元政を、日本文学史に登録し、衆知せしめた功績は、多く、江村北海（漢学者）の『日本詩史』[3]に帰さなければならない。江村北海の結論は、「その詩、韻格高からずといへども、意いたって平実なり。[2]」というにあった。江村北海は、元政が、詩人としては、明の袁中郎[28]の詩風によるということを認め、[2]従って、袁中郎が祖述したとされる白楽天の平易な詩風が、よい意味でも悪い意味でも、元政の詩に影響している、と判断したのである。（江村北海は、亜流といういい分をせず、「公安の委流」と表現する。）

これは、もとより、和歌についていっている結論ではなく、元政の詩についていっているのであるが、文学者としての元政の文学内容をといつめた江村北海自身の結論も、これとさしてへだたるものであった、とは考えられない。

しかし、江村北海が、元政について費した字数は、他の作家に比して、けっして少い方ではない。むしろ、この小篇（『日本詩史』）

にあっては、もっとも丁寧に紹介された作家の一人に、元政は属しているのだ。そこに、江村北海が言外に感じていたらしい元政の詩の魅力が感じとれる、わけでもある。

ところで、江村北海が「意いたって平実」と述べる「意」ということばと、「心」ということばを、元政は、その詩文の中では、正確に使いわけている。その例として、元政の「能因法師傳」の末尾の文[9]を掲げておく。

この物語に賛をして、こう述べておく。ぼくは、能因法師の歌が、真正直で、わかりやすいから、ひどく好きなのだ。およそ、苦心(意)しないで人の意表に出ようとしたり、また、苦心(意)して平易にしようとするのは、本当の歌人ではないのである。能因法師の歌は、そういうものではない。かつて、藤原の長能が、能因法師に、大江の嘉言の歌を学ぶように教示した時、彼は、ちょっと聞いただけで、すぐそのヒントを了解してしまったばかりでなく、一生涯の作歌をみな、大江の嘉言の歌にもとずかせてしまった。一体、大江の嘉言は、能因法師とは、同時代の人物であったばかりか、能因法師の友人でさえあった人だ。能因法師は、昔の人だからよいとか今の人だからいけないとかいわずに、自分の心で正しいと判断した時には、その判断に従ったまでのことである。その心(意)が、いかに正しいものであったかというには、この話を引合いに出すのが一番よい、と思う。その歌が、真正直でわかりやすいものになったのは、当然というべきである。苦心(意)したあげく、真正直でわかりやすい歌をつくりあげたのでないことは、これで明らかである。だからこそ、ひとたび歌をよむや、三日間も雨を降らせて、国中の民衆を潤すことができたのである。本当の正しさから出た歌でなかったならば、どうして鬼神を感じさせるなどということが、ありえようか。[9]

元政にとって重要な課題は、「意」ではなくして、「心」であった。それは、仏教徒である元政にとって、むしろ当然なことであったろう。執筆にあたっての正確な配字には、元政の、仏教学者としての教養があらわれている、と考えるべきである。もし、江村北海のいうように、「(詩) 意いたって平実」であったとしても、元政にとって、それは、より正しくより自由な「心」を得るためにとった手

段が、たまたま詩意の「平実」ということであったに過ぎまい。「達意」ということは、「平実」と必ずしも同一義ではありえない。まして、「こころ」が平実であったから詩文も平実になったとは、江村北海自身も考えてはいなかったであろう、と思う。

「心」が自由を求めるならば、「意」は、かならずしも、平易にのみ顕現するものではない。元政の詩文も、また、江村北海のいうようには、かならずしも、平易なものばかりではなかった。「意」がゆたかになるのは、「心」がより自由になったことの、一つのあらわれであろう。しかし、そうした中で、「平実」な詩を書き続けることは、文学者としての強烈な個性でなければならない。（江村北海は、そうした強烈な個性の系譜を、白楽天・袁中郎・元政にみようとしているわけである。）それは、詩語を凝視する深さ――に根ざす、一種の文学的技法に属するものであるのだから、「心」の文学云々とは、かならずしも直接的な関連性はもたない、と考えるべきであろう。江村北海の説は、文体（スタイル）に着目して詩の歴史を概説してゆこうとする立場に強く制約されたため、十分に筆をのばしきれなかったきらいがある。「その詩、韻格高からずといへども、意いたって平実なり。」という江村北海の総括は、したがって、その部分その部分の規定においては、さして批難するにあたらないほどあたっているのであるが、元政の文学がどういう文学であったかという全体的なイメージを描破する点において、やや欠けるところがあったという感をまぬがれない。

元政の「こころ」（心・意）という用語は、和歌において、時に深く、時に浅くとらえられていて、斧鑿の跡を残していない。そのこと自体は、なにも元政の文学だけにかぎったあり方なのではなく、和歌そのものが、そうした性質の文学であった、ということを指摘しておかなければなるまい。それは、さらにいうなれば、一つ一つのことばをかみしめかみしめ思索してゆく、汎日本的な文学的態度のあらわれなのであった、というべきなのかもしれない。したがって、そこでは、表現の平易さが、かならずしも、内容（「意」）の平易さと同一なのではない、という現象が起ってくるのである。（白楽天の文学が、日本で酷愛された理由も、こうした民族的な文学態度にもっともよく呼応する内容を秘めた文学であった点がみおとされることがなかったから、なのではなかろうか。）

すでに、元政に、こうした思考態度の前提があり、中国の文学者においても、程度の差こそあれ、このような態度に近い創作活動を行ったものもあるとするならば、元政の中国文学思想の摂取が、まず、こうした態度の類似した作家によることから始められたとして

も、すこしの不思議もない筈だ。

まして、「能因法師傳」において、能因が、いったんこうときめてしまってからは、師とすべき文学をかえることなく、しかも文体すらかえることなく作歌したことに感嘆している元政が、この世界を遠くはなれて文学を模索するようになることは、考えにくいことでもある。文学は、元政にとって、あくまでも、「こころ」（心・意）の文学であった。したがって、「心」という漢字でとらえられるべき中国の文学観には、当然の事ながら、強い関心をそそられていったのである。

ぼくは、いつだったか、間暇を得て、陣元贇老[3]と御一緒に、近代の文人である雷何思[26]・鐘伯敬[27]・徐文長[28]らの詩文集を読んだことがありました。その中で、ぼくは、特に、袁中郎[29]の文学が霊心巧発し、古人の表現をかりなくても、自然に詩となり文となってゆくのがよい、と思ったのです。ところで、今、九月の初ともなれば、夜も長く風もつめたいから、寂寂としてねむれないままに、燈火ちかく手にふれるものをとりとめもなく身にまといながら、ひとり、袁中郎の詩文集を披見することにいたしました。読んでいるうちに、「陶石簣に別る」[30]という詩にいたって、ふと、近日、老人が名古屋に赴かれることを思いだしました。それで、袁中郎の詩韻にならって狂斐十首をつずり、陽関の曲の心を文学作品にしてみたわけです。自分では、どうしたらもっとましになるかわからないので、清書して御鑑識をまとうと存じます。直していただければ有難いのですが。[34]

袁中郎の詩文が一見平明なものでありながら独創性に富んでいたのは、用語の規定が人なみはずれて緻密であったためである。元政も、また、この点を学びえていた。元政が、袁中郎の委流[2]でありえたのは、そうした文学性の本質への共感によったものである。用語が緻密になれば、その規定そのものも独創的にならざるを得ない。従って、そうした独創性を認めない立場にたって文学を評価する態度を堅持しようとする人々から袁中郎が批難され、「率易浅俗」等の批判を受けるに至ったのは、むしろ当然であったろう、と思う。江村北海の袁中郎に対するみかた[2]も、そうした立場の説を無批判に受入れたことに端を発している、ように思われるふしがある。もと

より、それが、中国文学史を構成するために有力な観点の一つであることは、ぼくとしても認めないわけにはいかないのだが、公安派文学の文学性そのものを具体的に追ってゆく方法として考えると、少なからぬ無理を将来するであろうことも、同時に指摘しておきたい気がする。つまり、一見平易に似て緻密に規定された用語を追いながら、その文学的内容を味わってみる繰作が、ここでは、不可避であるように思われるのだ。

元政が、ここに序（引）を掲げた一連の作品によってめざしたものは、「霊心巧発」[24]の文学以外にはなかった。彼自身は、その作品を「狂斐」[24]と称するが、その「狂斐」[9]とて、やはり「霊心巧発」[24]の文学的世界において評価されることを期待すべきものであったろうことは動くまい。

この文中において、まず考えてみたいのは、「狂斐」[48]という用字である。諸橋轍次先生の『大漢和辭典』によると、この熟語は、「進取の気に富んで文飾あること」の意であるとされ、「梅堯臣、途中寄二上スル尚書晏相公一二十韻ノ詩」に「下言狂斐頗ル及ブ古ニ、陶韋比格吾不レ私セ」とあるのを典拠にしておられる。（『辭源』・『康熙字典』ともにこの熟語は採用していない。）『大漢和辭典』にひかれた典拠は、『佩文韻府』五尾の中「斐」字の条下にあるが、ここでは「狂斐」という熟語の語義は追求されていない。「斐」字によって、「文飾」に関係のある語義であろうことが察せられるだけなのである。「狂」字は、『論語』に出てくる[12][13]ために、文言の世界では、特殊な配慮を予儀なくされる機会の多い文字であった。諸橋先生の定義は『論語』によって、もっとも基準となるべき機会が多い、儒家的立場からの「狂」字の解釈を、採用されたものと思う。しかし、この語義が、梅堯臣・袁中郎・元政らによってそのまま套襲されていたかどうかは、やはり別途に、実際に則して、検討されなければならないであろう。

まず、元政が、ぼくらが今日もっとも普通に使用している意味において「狂」字を使用し、しかも、きわめてみごとな定義づけを行っている例としては、

一体、その好むところにあまりにかたよりすぎたために、自分自身の霊光を失うものは、「癡」でなければ「狂」である。[23]

と述べているのを指摘するべきであろう、と思う。集注㉞に引用された前掲の「狂斐」なる語義に、もし謙譲の意を汲まなければならないとするならば、集注㉓の例による方が、『大漢和辭典』がよった集注⑫の語釈よりは、より妥当性がありそうな気がする。（しかし、ぼくらは、一方でこうして語義を明確にしておきながら、敢て「狂斐」という手段によって、「霊心巧発」の文学的世界に参加しようとしていた元政が別に存在していたことを知っておかなければならない。したがって、この場合においてもそれが、たんなる謙譲の精神より発した用字であったと速断することは、許されてよいことではない。）

元政の作品中、「狂」を描いてもっともみごとな形象化を果した作品としては、『能因法師傳』[8][9]を、まず挙げるべきであろう。その中、

カグヤの節信（ふしのぶ）というものがあった。これがまた、好事の士であったのである。ある日、はじめて能因に会って、どちらもひどくその邂逅を悦んだことがある。能因は、「今日お目にかかれたのは、なんというしあわせなことでしょう。」といって、ふところから小さな錦の包みをとり出した。中には、ひときれの木のくずが入っている。「これは、長柄（ながら）の橋ができた時のかんなくずですよ。ぼくが、これをこっそりと愛蔵するようになってから、ずい分たちますが、どなたにもお目にかけたことがありません。今、あなたのために包をひらきます。」と、能因がいうので、節信は、びっくりしたり喜こんだりして、これをおしいただいたものだ。さて、かんなくずの拝見が終ると、こんどは節信がふところから一匹の乾燥した蝦蟇を探し出して、こういうのだった。これが、有名な〈ゐでの蛙（かわず）〉でございますよ。」そこで、二人は一緒に感歎して、いつまでも、この蝦蟇をいじりまわしていたという。ところで、能因が持っているかんなくずの話は有名になり、ある時、陛下が勅令を下されて、能因にそのかんなくずを献上させようとなされた。能因が惜しがって献上しようとしなかったのは、いうまでもない。陛下はお笑いになって、たわむれにある夜、人を忍ばせて、こっそりこれをお奪いになった。能因は、すっかり元気をなくして、悲しんでいた。[8]

という箇所の淡々たる描写は、ことによくできているところであり、元政が、いかに心のひろい人間の理解者であり、また、いかによ

く「狂」の本質を洞察していたかを、おのずから物語るものである、ように思う。

ところで、かかる狂態への理解に注するためには、集注⑫にあげた『論語』の例も、集注㉓にあげた『艸山集続集』の例も、しっくりとはなじまない趣がある。ここでは、袁中郎が嘗って張幼于に送った書簡の中で定義した「顛狂」という用語について、すこしふれておく必要がある。

いつであったか、ぼくは、あなたに詩⑩をさしあげました。その詩では、〈誉れの起るは顛狂のためなり〉という表現をいたしました。顛狂とは、またなんというすてきなことばでしょう。あなたは、またまた、作詩上のひどい誤りとお考えだったかも知れませんが……。大体、ぼくは、あなたが顛狂かどうかわかっているわけではありません。ただ、むかしの人が〈顛ならず狂ならざればその名彰われず〉といっているのによって、そう賛美してみたのです。今、人々が、お金持におくる時には俠といい、知事さんにおくる時には河陽とか彭沢とかいって喜こばすようなものです。こういうのを套語というのですから、顛狂といったのも、套語を使っただけなのです。一体、顛狂の二字は、そんなに軽々しく人様にさし上げるようなことばではありません。狂の字は、孔子様がしみじみお考えになったことがあることばなのですから、⑫⑬これはもう論ずるまでもありません。しかし、顛の方はそう簡単に出典がみつかる言葉ではないのです。これを仏教界に求めてゆきますと、普化がそうだ、ということになる。張無尽の詩に〈槃山会裏筋斗を翻す、此に到ってまさに知る普化の顛なるを〉とあるのがそれです。普化は、顛ではあったけれども、本当に尊い仏さまです。仏さまじやしようがないとおっしやるなら、これを道教界に求めますと、周顛という人がいる。明の太祖が敬礼したほどの人です。道教の世界には、顛は一番多いのです。藍采和・張三丰・王害風たちは、みな顛なのであります。これを儒教界に求めますと、米元章がおります。米元章は、石をおがんで丈人と呼びました。〈蔡京に与うる書〉で、書の中に一つの船をえがいてしまった。その顛たるや、もっとも笑うべきものであります。しかし、臨終の時に合掌して〈衆香国より来たり、衆香国に去る〉と云った。その去来たるや、まことに堂々たるものです。ぼくは、あなたが顛狂だったらどんなにすばらしいだろうな、と思っている

だけなのです。もっとも、本当に顛狂だったら、あなたを南面させて、あなたにつかえなければならなくなってしまうでしょう。どうして、あなたとぼくとが友人であることができましょうか。ぼくの話を、おらあわかんねえなどというならば、あなたとぼくとは、ようするに全く無縁の人間だ、ということになりますが、如何。[11]

この書簡は、実は、きわめて長文であるので、ここでは、必要箇所のみを紹介しておく。（直接に「張幼于」を論じた拙稿〈書陵部紀要第二十号〉にやや長く翻訳したものがあるので、張幼于その人についての考証とともに参照されたい。）執筆者の袁中郎には、『狂言』という著作があり、明版が現存しているが、「狂」もしくは「顛狂」について正面から論じている文章は、この外にはないようだ。「玄門尤多」という袁中郎の指摘によるならば、語義のリクリエーションにあたって袁中郎が暗示を得たのは、儒教や仏教の伝統裡にあった解釈なのではなく、おそらく道教における「狂易」であった、と考えるべきであろう、と思う。

袁中郎が、この書簡にのべられている思惟の過程を経て、先に張幼于に送ったという詩は、集注⑩にあげた、

家の貧しきは、任侠たるにより、
誉の起るは、顛狂のためなり。
事を盛んにして、点を追求し、
標を高くして、李王に属す。
鹿皮もて臥具に克へ、
鵲尾もて経床に薦く。
また名字を呼ばず、
弥天、小張と説く。

を指している。

この詩は、イロニカルな会話が用意された詩である。むしろ、イロニカルな使い方がされていない用語は一つもないと観念して見定めてゆく必要がある詩である。張幼于は、蘇州きっての大金持の子として生れ、人柄はよいが、内攻的でやや卑屈になりやすい人柄の持主である。彼が若くして有名になったのは、天賦の感受性と、桁はずれのガリ勉の賜であり、袁中郎からは、もっとも顚狂に遠い性格者と規定されていたのである。「事を盛んにして、点を追求」したこと、「標を高くして、李王に属」そうとしたことは、張幼于の場合、おそらく事実であったろうが、袁中郎は、そのいずれもつまらないことだと考えていた。李王七子の文学の亜流が全く文学を失ってしまったことを、袁中郎はなげいているのであって、それに対する反対の根拠をたずねてゆくのが、袁中郎文学の一つの骨子だったのであり、その結果として、人々から公安派と呼ばれる新しい文学を確立することを得たのでもある。袁中郎は、当時の文壇の主流派にありながらも、やや会話可能と考えられるかけがえのない人物であった張幼于に、ほとんど不可能とも思える難解な会話をいどんだのだ。（この難解な会話が両者の間でめでたく結実したという結論だけは、ここで紹介しておく必要があるだろう。）

袁中郎の詩文を「特愛㉞」し、その「霊心功発㉞」に魅せられた結果、「狂斐㉞」をつずった、元政の心裡過程の中で、「狂」であることに関する思索は、かなりの重みを占めていた筈である。元政が「酷愛⑨」し、その伝をものした能因は、その伝中⑧では、たしかに「狂態」を呈した人であり、その「狂」は、上述の諸解釈の中では、もっとも袁中郎の定義する「顚狂⑪」に近かったことを首肯しなければなるまい。（集注⑫～㉒を参照のこと。）

元政自身が規定した、集注㉓における「狂」は、「痴」と共に、「その好むところにあまりにかたよりすぎたために、自分自身の霊光を失ったものの謂に外ならなかった。しかし、『能因法師傳』中集注⑧にひいた説話を文学化するにあたって、元政は、この能因の狂態を、決して「その好むところにあまりにかたよりすぎたために、自分自身の霊光を失」ったものとしては、処理していない。集注㉓の定義を教示された慧明は、若くして世を去った宜翁とともに、元政の身辺にあって教導をうけ、また、元政の心の友として語り合うことの多かった人物である。元政の『艸山集』正続に収められた書簡の中で、陳元贇と並んでもっとも多くの書簡を存していたのも、

また、この慧明であった。

この慧明は、元政の書簡によるならば、なんともすさまじい勉強家で、これではかならず病気になるだろう、と心配されるほどであった。[23] 元政が、杜甫の「水流れて心競はず、雲ありて意倶に遅し」の句を示して反省を強いたのは、[23] またこのゆえであった。「楽しまざれば、学にあらず。[24]」――そう、元政は云いきっている。しかしながら、慧明は、聡明であり、元政の「こころ」の学を、豊かに理解しえた人でもある。元政自身が誰よりもよく、そのことを知っていた。[25]

こうした、元政と慧明との関係は、人間関係としては、袁中郎と張幼于の関係に酷似しているようだ。元政は、袁中郎が張幼于に行なったようなイロニカルな交友法を慧明に適用したことはなかったけれども、その学を好むことに偏して学を楽しもうとしない点を心配しながら、その大成を祈った会話法において、全く符号する人間関係を暗示している、と考えてよい。だから、袁中郎は張幼于に「顛狂」の世界を示し、元政は慧明に「痴狂」の人となることを禁じたけれども、結局は、なんとなく似た世界を指し示していたことになるわけである。（この世界を、性霊の世界である、と断定することは容易である。しかし、こうした規定は、してみたところで、文学の本質を開示することにはならない。したがって、ぼくは、この結論を留保して、更に少々、具体的な分析を行っておきたい。）

袁中郎は、もともと、道教の世界に深い関心をもった禅界の人であり、元政は、戒律を堅持する日蓮宗の僧である。したがって、その悟証が同一であったわけはないが、悟証を契機にして、相互に共鳴しうる思想・文学・交友関係・教育理念等が生じたとしても、少しのふしぎもあるまい。また、そうしたところまで悟入しえていなかったら、まったくとるに足りないクソ坊主としかいいようがない、わけでもある。（「心」を異にしつつも、それより発する「意」の境涯において、人間は十分にみのり多い会話を果しうるものなのではあるまいか。文学の問題の一つが、確かにそこにある筈だ。）

元政は、すでに『能因法師傳』の執筆にあたって、その「狂態」に関する深い理解を示しているにもかかわらず、慧明には「狂」を禁止し、間適の趣をもつ中国の文学作品を指示することによって、直接的に「狂」の世界に直入するかわりに、間接的に楽しむ道をひらき示したのである。それは、修行中の慧明にとって、こうした過程を経ることが一番よいとする元政の判断に深く根ざした処置でも

あったろう。（こうした、無理をしない、対人会話のあり方が、実は、なににもまして、袁中郎と元政の酷似する点である、ともぼくは考える。一言しておくと、張幼于の場合は、袁中郎の対人法としては、きわめて特異なものであった、のである。）したがって、元政が集注㉓で示した狂字解は、この際の慧明にとってもっともふさわしい解であったわけで、必ずしも、元政のすべての狂字解を示すものとは考えられないのである。元政が、慧明をさとすにあたって、袁中郎詩などを引用することなく、慎重に杜甫によって示していることを、ここでは重視しておくべきではなかろうか。

「能因法師傳」[8]における場合と、「示慧明書」[23]における場合と、二つの「狂」字解は、全く同一ではない。元政の文学においての「ところ」と「狂」字の関係は、ここにおいては、いまだ解決しえない謎を秘めている、としかいえない。とすると、問題は、「狂斐」という字句を元政から示された陳元贇[3]自身にもってゆく方が、まだよいのではあるまいか。

『元元唱和集』より引用した、「狂斐」字の出典になる「送元贇老人之尾陽詩幷引」[24][35][36]の十首の詩の母体であるとされる袁中郎の「別石簣詩」は、韻の符号するところからみて、楽府体で作られた「別石簣」[36]（『梨雲館類定袁中郎全集』元禄九版。巻之一。第十二丁ウ）四四一字を指すものと考えられる。時は、同じ『元元唱和集』元贇詩に、上記の元政詩に対する返答の詩があり、そのはしがき[35]に徴するならば、寛文二年（一六六二）の重陽後、日ならずしての作と断定すべきである。

『元元唱和集』は、刊記に、「寛文三暦癸卯孟春日書林村上勘兵衛刊行」とあるが、詩序は、元政詩において「寛文弐年冬十月下浣日」、元贇詩において「寛文壬寅季秋下浣日」に、日を同じうして書かれているのだから、作品は、『元元唱和集』の中でも、もっとも遅く成立したもののようである。「元贇詩」の方が、「目録」上「附」の中に収められていることからみると、あるいは、その完成が、予定よりも遅れて届けられる等のことがあったかも知れない、と察することもできよう。ともあれ、この元政の著想は、陳元贇のいたく称するところとなり、唱和の完成したことによって、文学を通じての両国人の会話が、まずめでたく成就したことを示している。

会話が成立した時点において、陳元贇は、七十六才、元政は四十才になっている。袁中郎は、万暦壬辰（一五九二）の進士であり、陶石簣[36]は、万暦己丑（一五八九）の進士であったが、袁中郎がその詩[36]中其八の中で、「公家廿一弟、超脱是其倫。」といっているのを解

釈して、元政は、陶石簣を袁中郎より二十一才の年長にみたてたのかもしれない。

陶石簣は、黄梨洲[32]の『明儒学案』にも伝をとられた学者で、張幼于とともに袁中郎から書簡を送られたことのもっとも多い人物の一人であった。書簡の内容から、袁中郎が、陶石簣の学問と人柄に感じ、先輩として深く私淑するところがあったことが察せられる。『明儒学案』に伝をとられた陶石簣は、銭牧斎[31]と朱竹垞[33]から、きわめて注目されて伝をとられたにもかかわらず、結果的には筆誅を加えられたため、それだけ清人から重んぜられることがなかった張幼于よりは、幸福な文人であった。それも、やはり、その人柄（「心」）によったものであったかもしれない。

この、元政と陳元贇との仲が、陶石簣と袁中郎のごときものでありたいという考えには、陳元贇も、同感であった。[35] しかし、元政の側からの「狂斐」という提示は、軽く受けながしてしまったようだ。――陳元贇は、元政の袁中郎ではありえなかったのだ。

この際の詩による会話は、[36]「次韻」という方法でなされた。つまり、袁中郎が陶石簣におくった詩の形式をそのままかりて、「詩意」により「心意」によって、「心」と「心」の会話をはかろうとしたものであった。陳元贇は、元政が「君能言和語、郷音舌尚在」[36]と其三にのべたように、日本語に巧みな外国人であった。そして、元政は、後世わが国最大の漢詩文別集を公刊されるに至った、語学の天才児であった。そのことが、前提になって、高次な詩を通じての会話が成立しかかっていた、と考えるべきであろう。

両者の和韵のもとになった袁中郎の詩は、[36]陶石簣におくられた詩の中では、一きわきわだって袁中郎自身の世界に近い内容を吐露したものである。したがって、この詩の内容そのものを、両者（元政と陳元贇）の詩の内容としてもりこむことは、まず不可能なことであった、と思う。それに、つかずはなれずにいながら（自らの詩想を破綻させてはまずいから）結局、流してゆかなければならないところが多くなり、したがって袁中郎の原詩よりは振幅のせまい作品になっていったのはやむをえない。[36] たとえば、

（袁中郎）　　（元政）　　（陳元贇）

学道不学禅　　学仏不学禅　　形使心為役

談星不談義　解経不解義　礼教身服義
愛曲不愛音　読書不読文　五石不甘(ママ)
読書不読字　作詩不作字　十疋成走字

の条とか、

湖上花作明証　公孰依孔為証　師妙法蓮華証
別時衰到時盛　孔若衰釈若盛　儒不衰釈不盛
後来朝不敢問　公強立文昌祠　偶与詩実相並
我好色公多病　雖老矣幸末病　豪興起病忘病

の条とか、

三入浄寺門　清談無点俗　揮塵忘道俗
寺僧笑狂験　相忘如痴験　謔浪若戯験

というように、袁中郎の詩がほとんど絶唱に近い佳句を得ている時には、両者ともに、原詩の面白さは十分に理解しながら、どうにもならなかった趣が感ぜられて、ほほえましい。両者は、もともと、一緒にこの原詩を味わいながら、陽関の曲の「心」をかよわせようとしているのだから、それでも十分に、用を達しえたものと思う。文学作品そのものよりも、文学的会話の内容は、はるかに高次なも

のであり、ゆたかなものであったことを察しなければならない。

こうしてみると、元政が撰択した「狂斐」という字句の意味には、単に〈自分が下手だから〉「狂」なのではなくて、原詩そのものが「狂」としかいえない内容であり、それに和そうとする自分たちも「狂」としかいえない、という意識が強く働いていたのではなかろうか、ということを、附加的に考えなければならない、ことになりはしないだろうか。陳元贇も、その意味においてならば、不賛成であったとは思えない。しかし、もしそうであるとしても、元政がここでのべている「狂斐」の字義が、いかにも程度の低い段階に甘んじていたのではないかと疑う余地は存する。なんとなれば、その作品が、内容的にみて明らかに二番煎じのものだからである。とするならば、日本在来の意味での「狂」、つまり、「くるい」の芸術化への段階として認められる、「もどき」の芸としての、芸能史における「狂」の意識が、元政の場合、反映していることがある、かもしれないのだ。一体、日本人の意識の中では、「狂」字の理解にあたって、「もどく」意味と、もう一つ「くるい」という日本語のイメージが随伴することが多く、十分に第一義的な文学としての価値批判にたえる作品さえもが、「狂」の字に関係があると、ともすれば、二義的な作品として理解される傾向がある。したがって、あえてとりあげるわけだが、この元政の用字に則してみるならば、たしかに、それは、どちらともいえない面を含んでいることを拒否するわけにはいくまい。それで、ぼくは、ここでは、別にそのような解釈をとらなくとも理解ができるという一点だけを強調し、同時に、もう一つだけ、これは絶対に「もどく」意味にも「ものぐるい」の意味にも解釈できない、元政の作品例[87]をあげておくことにする。

おそるべき大根よ　おそるべき艾(もぐさ)よ
大根はとびあがるほど辛く艾はとびあがるほどあつい
辛くなかったら麪類の毒を消すことはできないし
あつくなかったら病みつかれた骨をよみがえらせることができない
大根は辛く艾はあつい

そうきまっている以上もういうこともないだろう
ぼくに許されていることは
思い出して使ってみたり置わすれてみたりしながらタイムリーに効果が的中することを待つだけだ
昨日ぼくは高槻村の越人というお灸の先生をたずねた
三年もききつずけるという艾よ
十一穴の急所よ
ああお前はなんという厳粛な顔をしているのだ
まるで屈突蓋というこわい名前の人に逢ったみたいではないか
もえひろがる火の勢はただちに腸(はらわた)にしみわたり幾千の鬱血が一時にとけた
今日ぼくは住みなれた老母の家にいる
老いたる母はぼくのためにおいしいものを食べさせるという
かす汁は乳のようであり蕎麦は絲のようだ
蕎麦というものは特別な食品だ
姿は枯淡であり色もあわく　味とはいえない味がある
この上からだに羅(あやぎぬ)を重ねて雪のように白く染ってしまいたいとは思わない
おそるべき大根よ　おそるべき艾よ
病みつかれたぼくはその辛く熱いことを拒みはしない
毒を消し病からよみがえるのでなかったらどうして今日蕎麦をすすれよう㊲

集注㊲によって、さらにその配字・表現を辿ってみると、この元政の詩想は、「狂歌」をもってその題としているにもかかわらず、一つも道教的なイメージをかりようとしていないことがわかってくる。そこには、程度の差こそあれただ孤独なだけの人間の姿が、きわめて客観的に描かれているだけなのだ。その「孤独」自体が、あるいは元政がつきとめえた人間の「狂」であったのかもしれない。

この詩は、袁中郎の諸詩ほどは、豊饒さを感じさせない。ただ、冒頭の部分と、それに

三年艾兮十一穴　巖手如逢屈突蓋㊲

というあたりだけが（袁中郎詩の風骨を感じさせはするが）決して模倣といえないほど、元政自身のものとなっている、ようだ。むしろ、道教的なイメージを将来する字句をさけて、日本人として仏教徒として必要なだけの詩材を撰び詩にしている点を、もっと高く評価すべきでなかろうか、とぼくは考えている。陳元贇は、元政が出さなかった詩材だからとすぐ飛びついて、

気体冲和病輒已　那羨玄霜并絳雪㊲

とやったが、かえってみずからの詩想をこわしてしまった。したがって、陳元贇の方のは、まず完全な失敗作になると思う。（陳元贇は、袁中郎の「狂歌」に「嘘気若雲烟、紅紫殊万状。醯鶏未発覆、甕裡天浩蕩。㊲」とあるのをふまえてこの挙に出たのかもしれないし、「次韻」のルールの上からは非難するにあたらないかもしれないが、ともかく「萱堂真話仏瑠璃、与我清涼散一啜。㊲」という末尾に至って、元政のまったく清冽な詩境に応えるべき、たくましい思想を打ち出すことを得ず、この際は、兜を抜いだかたちになる。）道教の徒の生態をつぶさに観察していた袁中郎と、これをほとんど観念的にしか理解しえなかった日本の元政とは、同一の詩想によって、「狂」をうたうことはできない相談であった。なまじわかっていただけに、陳元贇には、不用意な詩想が宿ったのだ。純粋に「心」の問題で

あるべき「狂」の文学においては、あるいはその言語が実在する、土地の文学伝統の中で詩材が求められてゆくことが、もっともふさわしいことになるのではあるまいか。――元政が、「狂」としての自己を凝視し、自得できるようになった契機の一つには、その生涯の羈絆となった、老いたる母との共同生活という問題があった、に違いない。そこから逃げてゆこうとしなかったからこそ「狂」を自得しえるようになったのであって、たんに、観念的に考えつめていって理解しえたのではなかったろう、とはぼくも思う。仏教徒として、それがきわめて特異な求道であったということは認めなければならないと思うが、そうした求道を通して、文学者としては、一つの新しい境涯をひらきえたのでもある。

元政は、「元元唱和集」をなしてから、ほぼ五年たって、その若い有為な人生を終ってしまった。享年四十六才と伝えられている。陳元贇は、それより三年遅れて、異国の土に八十五才の天寿を全うした。両者が文学的会話を果しえた期間は、足掛け十年間であったにすぎない。当然のことながら、元政は、陳元贇に、陳元贇は元政に、十分に理解しかねる一面を、のぞかせていたであろう。そこには、やはり、荒涼たる風の吹く原野に、ふと置きざりにされたような、淋しい文学の領域がひろがっていたものと思う。

ぼくは、この序説を終るにあたって、釈元政の文学における「心」と「狂」について、あえて、結論を出そうとは思わない。結論は、「集注」の中に、おのずからひそんでいる筈だ、と思うからだ。（この集注を一つの論とみなしていただきたい。）世上では、元政の歌は能因の亜流であり、元政の詩は袁中郎の詩の亜流であるという説が公布されている。

〈以上〉

〔集注引得〕

①釈元政（歌林一枝）
②釈元政（日本詩史）
③陳元贇（同上）
④卿山和歌集（和歌文学大辞典）
⑤卿山集（国書解題）
⑥卿山集続集（同上）
⑦元元唱和集（同上）
⑧能因法師伝（卿山集）
⑨能因法師伝贊（同上）

⑩「張幼于」詩　（袁中郎全集）
⑪「張幼于」書　（同上）
⑫狂狷　（論語）
⑬古狂今狂　（同上）
⑭顛狂　（佩文韻府）
⑮顛狂　（大漢和辞典）
⑯癲狂　（同上）
⑰不顛　（佩文韻府）
⑱非顛　（同上）
⑲不狂　（同上）
⑳非狂　（同上）
㉑狂易　（大漢和辞典）
㉒狂易病　（同上）
㉓示慧明書　（艸山集続集）
㉔与慧明書　（同上）
㉕答慧明書　（同上）
㉖雷思霈　（明人藝林名譜）
㉗鐘惺　（同上）
㉘徐渭　（同上）
㉙袁宏道　（同上）
㉚陶望齢　（同上）
㉛銭謙益　（同上）
㉜黄宗羲　（清人藝林姓名捷覧）
㉝朱彝尊　（同上）
㉞「送元賓老人之尾陽詩引」　（元元唱和集）
㉟「和送元賓老人之尾陽詩引」　（同上）
㊱「別石簣」詩並和韻詩表解
㊲中郎・元政・元賓「狂歌」表解

〔集注〕

①釈元政　僧元政ははじめの名を日政、また日逞・日峰・日如などいへり。又、泰空ともいひ、不思議・妙子なども号せり。深草の里にかくれしかば世に深草の元政とよべり。寛文八年二月十八日寂す。とし四十六。この法師はきはめて悟道の人にて、ことに詩歌の道にもすぐれしことは、世の人あまねくしる所なり。山居のこころをよめるうたに、

朽ちぬとも猶をりをりは問ふ人のこころにかかるたにのかけはし

この歌などことに秀逸のよしものにしるしたれど、そのこころすこしくききとりがたしとおもひしに、又或書を見しに、或人京師にゆきて、深草の里元政の菴室の跡をみしに、をりしも開帳ありて、かの法師の自筆の和歌のかけ物をみしに、

朽ちねただをりをり人のとひくればこころにかかるみねのかけはし

これによれば、初のうたは後の世の人、さまざまにつたへ誤りしものと見えたり。又母の遺骨を身延山へをさめんとて、そのこつを拾ひしときよみて手向しうたとて、

なにゆゑにくだきしほねのかたみぞとおもへば袖に玉ぞちりける

——『歌林一枝』(中神守節)。『日本歌学大系』第九巻。第八十九頁所収。佐々木信綱・久曾神昇校訂。内閣文庫本。

②釈元政　僧元政は、法華を修持す。戒律堅固にして、雅尚風雅。著はす所『艸山文集』あり。嘗て茅を京南の深草里に結ぶ。香火今に到るまで絶えず。其の詩、韻格高からずと雖も、意致平実なり。元政、本江州の士族、郷に老母あり、後に菴側に迎へ養ふ。孝敬純至なり。『客中』の絶句に曰く、『逐レ月乗レ風出二竹扉一、故山有レ母涙沾レ衣、松間一路明如レ昼、遙識倚レ門望二我帰一』と。其の実を記すなり。是れより先き、明人陳元贇(いん)、乱を避けて投化す。後に山人を以て張藩の聘に応ず。時時、京師に来朝し、元政に会晤す。心機契合方外の盟を締ぶ。『元元唱和集』あり。元政の詩中に云ふあり、『人無二世事一交常淡、客慣二方言一譚毎諧』と。亦た其の実を記するなり。或ひと曰く、「元政、袁中郎の集を得て之を悦び、以て帳秘と為す」と。余謂ふ、中郎の詩は、白香山を祖述し、七子の套熟を矯めんと欲し、勤めて陳腐を去る。而れども、其の弊や諸(これ)を率易浅俗に失す。元政、『元贇に贈る』に曰く、『公本大唐賓、七十六老人。吾少レ公卅六、才調況非レ倫。不レ知何夙世、合レ如二車雙輪一』等。正に是れ公安の委流なり。或ひとの説、恐らくは然らん。——『日本詩史』(江村北海)。天明八版。岩波文庫本(西沢道寛校定)。第六十九頁。

③陳元贇　元贇、字は義都、既白山人と号す。崇禎の進士下第する者と云ふ。朱之瑜(しゅ)、字は楚璵(そよ)、舜水と号す。嘗て魯王の賓客と為る。明亡び、商舶に附して長崎に来る。人、文儒たるを知るなし。窮困備(つぶ)さに至る。独り筑後の安藤省菴あり、謁を執りて弟子と為

る。省菴世々柳川侯に事へ、歳禄二百石なり。是に於て其の半を分ちて舜水に供し、以て薪水を助く。常藩、之瑜の名を聞き、聘召し、禄五百石を賜ひ、眷遇甚だ篤し。年八十余にして終ふ。私に諡して文恭と曰ふ。林・何・顧の三人は其の顛末を詳にせず。大高季明の『芝山稿』中に三人を明儒と称し、推奨特に至る。意ふに三人は長崎に止りて京に入らざるか、或は後再び西帰する者か。又『芝山稿』中に元贇・之瑜の事を説くこと他説と異なり。其の言に曰く、「陳は杭州の販夫、朱は南京の漆工、竝に学を知る者に非ず」と。余未だ其の孰れか是なるを知らざるなり。詩の若きは則ち元贇を勝ると為す。元贇の詩、間々佳なる者あり。その気韻粛索たる者は、亦た唯だ邦亡び家破れ、孤身海を航す。理固より然らん。何・林・顧の三人の詩、『芝山吟稿』暨び『名勝詩集』に見ゆる者、鄙俚最も甚だし。僧独立、善書に名あり。詩は論ずる亡きのみ。之瑜の詩は余未だ見ず。或は曰く、「『之瑜文集』三十巻あり」と。——同上。第七十頁。

④草山和歌集　歌集。僧元政著。寛文一二1672刊。一五〇首。初めに立春などの作を置き、終りに辞世を録し、首尾の体裁を整えてはあるが、全体的には序次必ずしも整えてなく、草稿のままの形跡を留めている。『枝註国歌大系』第一四巻所収。歌風は古今を旨としてのどやかで、刻意彫琢の痕なく、『能因法師伝』に示された和歌観がほぼ忠実に具現されている。題詠と即事の詠とが多く、概ね仏教的な風韻がよい意味で匂っているのも、その真率平易の産物、すなわち平常心そのままに生れた歌だからであろう。〈父の久しく住める家にて月前梅　袖の上に月やあらぬとかすむ夜に春や昔の梅の香ぞする〉はその作風を窺うに足りる。〔参考〕『標註卅山集』(昭五・平楽寺書店)。——『和歌文学大辞典』(昭和三七・明治書院)。第六〇九頁。穴山孝道執筆。

⑤草山集　二十一巻。僧元政撰。著者の詩文集。巻符を周興嗣の千字文にて分ち、天地玄黄の天より、寒来暑往の往に至り、敍、書、記、伝、行状、墓誌、銘、箴、賛頌、仏事、雑著、賦、五言古詩、七言古、五言律、七言律、五言絶、七言絶、雑体等に序す。寛文三年癸卯〔一六六三〕妙心寺大嶽の序、同二年明人陳元贇の題辞等あり。同九年通憲の撰したる行状記を掲ぐ。二十一巻の中一巻は目録なり。続集十巻あり、次に掲ぐ。——『国書解題』(佐村八郎)。巻上、第七七五頁。

⑥草山集続集　十巻。僧元政撰。著者の詩文にして、『草山集』に入らざりしものなり。延宝二年甲寅〔一六七四〕出版す。——同上。

巻上、第七七五頁。

⑦ 元元唱和集　二巻。僧元政撰。明人虎林既白山人陳元贇〔帰化人〕と著者と交遊して共に其の詩を和韻し次韻したるを筆録せるなり。多くは題下に序引を附して、其の事情を説明せり。寛文二年壬寅〔一六六二〕に認めたる両人の敍文あり。――『国書解題』（佐村八郎）。巻上、第六〇八頁。

⑧（前略）有加久夜節信、亦好事士。一日初見因、相得甚悦。因曰、今日会面可謂多幸、何以賞君。廼自褚中出小錦囊。中有一片木屑。曰、此長柄橋銑屑也。吾秘之久矣。今為君発之耳。節信驚喜珍戴。於是、節信亦探懐、出一乾蝦蟇。曰、此所謂井堤蛙也。相共感歎把玩不已。帝嘗勅因進其木屑。因惜焉不肯進。帝笑而令人夜中奪之。因蹉咤悲之（後略）。――『艸山集』（元政）。寛文九版。巻之六（宙之巻）伝、第十一丁㋐。「能因法師伝」。

⑨（前略）賛曰。余酷愛能翁之歌真率平易也。大凡歌人、不刻意求奇、又刻意求平、並非真歌人矣。翁則不然。長能示嘉言歌、一聞即領焉、而一生之詠皆本於玆矣。嘉言同時之士、而翁之交友也。翁不以今人古人、而為心惟正者従之。其意已正如此。宜乎、其歌真率平易也。是非刻意求之明矣。故一詠能降三日雨、而潤天下蒼生。苟非出於正者、豈至感鬼神也哉。――『艸山集』（元政）。寛文九版。巻之六（宙之巻）伝、第十四丁㋒。「能因法師伝」。

⑩家貧因任俠、誉起為顚狂。盛事追求点、高標属李王。鹿皮克臥具、鵲尾薦経床。不復呼名字、弥天説小張。――『梨雲館類定』袁中郎全集』（袁宏道）。元禄九版。巻之五、五言律、第十四丁㋓。

⑪（前略）僧往贈幼（ママ）於詩。詩有誉起為顚狂句。顚狂二字甚好。不知幼于亦以為病。夫僕非真知幼于之顚狂。不過因古人有不顚不狂其名不彰之語、故以此相賛。如今人送富賈則曰俠、送知県則曰河陽彭沢。此套語也。夫顚狂二字、豈可軽易奉承人者。狂為仲尼所思、狂無論矣。若顚在古人中亦不易得。求之釈、有普化焉。張無尽詩曰、槃山会裏翻筋斗、到此方知普化顚、是也。化雖顚去、寔古仏也。求之玄、有周顚焉。高帝所礼敬者也。玄門尤多。如藍采和・張三丰・王害風之類、皆是。求之儒、有米顚焉。米顚拝石、呼為丈人。与蔡京書、書中画一船。其顚尤可笑。然、臨終合掌曰、衆香国裏来、衆香国裡去。此其去来、豈草草者。不肖恨幼于不顚狂耳。若寔顚狂、将

北面而事之。豈直与幼于為友哉。至于所説、呉儂不解説、則尤与幼于無交渉（後略）。——『梨雲館類定 袁中郎全集』（袁宏道）。元禄九版。巻之二十二、尺牘、「張幼于」、第十九丁㋒。

⑫子曰、不得中行而与之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不為也。——『論語子路第十三』。書籍文物流通会影璜川呉氏仿宋刊本論語集注、下冊。巻七、第七丁㋐。

⑬（前略）古之狂也肆。今之狂也蕩（後略）。——同上。下冊。巻九、第六丁㋔。

⑭顛狂　〔杜甫詩〕顛狂柳絮随風舞。軽薄桃花逐水流。〔又寄漢中王詩〕尚憐詩警策。猶憶酒顛狂。〔元稹詩〕峴亭今日顛狂醉。舞引紅娘乱打人。〔李商隠送宮人入道詩〕鳳女顛狂成久別。月娥孀独好同遊。〔韓偓詩〕把釣覆綦兼挙白。不離名教可顛狂。一作癲。〔元稹庁前柏詩〕我本顛狂躭酒人。何事与君為対敵。——『佩文韻府』七陽、狂。

⑮顛狂　気がくるふ。癲狂。又、挙動の落着かない喩。〔杜甫、漫興詩〕顛狂柳絮随風舞、軽薄楊花逐水流。〔李商隠、送宮人入道詩〕鳳女顛狂成久別。〔白居易、感桜桃花因招飲客詩〕何曾酒後更顛狂。——『大漢和辞典』（諸橋轍次）、巻十二、頁部、二九五頁。

⑯癲狂　きちがひ。ものぐるひする。〔素問厥論注〕癲狂、走呼妄言妄見、陽明之脉病也。〔元稹、庁前柏詩〕我本癲狂躭酒人、何事与君為対敵。〔倭名類聚抄、疾病部、病類〕癲狂、唐令云、顛狂酗酒、不得居侍衛之官、俗云毛乃久流比、本朝令義解云、顛発時、仆地吐涎沫無所覚也、狂或自欲走、或自高称聖賢者也。——同上。巻七、疒部、一二一一頁。

⑰不顛　〔宋史張愈伝〕窮亦自固困。亦不顛不貴人爵知命楽天。〔白帖〕不顛不狂其名不彰。〔又蘇軾詩〕病吟終少味。老酔不顛成。——『佩文韻府』一先、顛。

⑱非顛　〔宣和書譜〕釈亜栖喜作字。毎論張顛、云、世徒知張之顛而不知実非顛也。観其自謂吾書不大不少得其中道若飛鳥出林驚蛇入草則果顛也耶。〔戚輔之佩楚軒客談〕米老与伯時、書自辨非顛。世謂之辨顛帖。——同上。

⑲不狂　〔見上〕〔司空図詩〕南華落筆似荒唐。若肯経綸亦不狂。〔高駢詩〕却縁龍節為縈絆。好是狂時不得狂。〔僧貫休軽薄篇〕不顛不狂其名不彰。〔楊万里九日詩〕正冠落帽都児態。自笑狂夫老不狂。〔元好問藍采和像詩〕長板高歌本不狂。児曹自為百銭忙。——『佩文

韻府』七陽、狂。

⑳非狂　〔史記酈生伝〕人皆謂之狂生。生自謂我非狂生。〔顧況遊子吟〕未老霜邊鬢。非狂火燒心。――同上。

㉑狂易　心が狂って性情が変ること。〔周礼、天官、閽人、注〕怪民狂易。〔漢書、五行志〕失在狂易、故其咎狂也。〔注〕師古曰、狂易、謂狂而易其常性。――『大漢和辞典』（諸橋轍次）、巻七、六七七頁。犬部、狂。

㉒狂易病　心が狂って性情の変る病。〔漢書、外戚伝〕素有狂易病。〔注〕師古曰、狂易者狂而変易常性也。〔白虎通、攷黜〕有狂易之病。（同上）。

㉓子察吾子為学也、夙夜孳々惟日不足、尚恐失時。然予毎観吾子如此勉励不息、而未見吾子念頭安穏而甚楽色。吾疑切於好学而有所勝於彼乎。吾非唯畏吾子之学之泛泛然而不円熟、且慮其久則積而成病患焉。吾試喩之。譬如写書。欲遂畢功、則必文字脱落、筆画差誤。未数十紙労倦早至。而復不記所写何事。是匪特不全其功、亦損其心力。視之彼不緩急者功全而力不損、其何如哉。如仏告誦経比丘、以不緩不急、及呵阿那律、是也。嗟乎、吾言不足取焉。仏豈欺人乎。儒者亦有言、志道懇切固是誠意。然急迫求之、則反為私已。若夫僻於所好而失自己霊光、則非癖、是狂也。杜少陵曰、水流心不競、雲在意俱遲。彼詩人尚得此光景、吾子深察焉。嘱嘱。――『艸山集続集』（元政）。延宝二版。第二十八（歳之巻）、第廿二丁オ。「示慧明書」。

㉔（前略）　吾子、寂寞之中読書消日、否。読書只在兼得皮肉骨也。得文皮也。得義肉也。得意骨也。夫皮肉骨之於人也、缺一何如。可為人乎。読書亦然。三者缺一、則非学矣。若初学之人、三者難並得、則得文而得義而得意而已。又須得文而楽、得義而楽、得意而楽。不楽則非学矣。（後略）。――『艸山集続集』（元政）。延宝二版。第二十五（閏之巻）、第十三丁ウ。「与慧明書」。

㉕（前略）　浄誠移住、否。前日告更名字。病中総如遺忘。昨夜眠坐之中、忽然念之、得了心二字。若不了心、万行徒施（施カ）。了心正明便与仏同。宜以正明且為法諱。憂病之中、把筆如杵（件カ）。吾心何尽。――『艸山集続集』（元政）。延宝二版。第三十（呂之巻）、第十五丁ウ。「答慧明書」。

㉖雷思霈　字何思。万暦辛丑進士。工詩。（列）（綜）（名）。――『明人藝林名譜』（玉木環斎）。明治二〇石版。第四集㋒第一丁ウ。

㉗鐘惺　字伯敬、号退谷。万暦庚戌進士。工詩画。（佩）（彙）（史）（列）（綜）（志）。——同上。第六集、中(シ)、第三十六丁(オ)。

㉘徐渭　字文清、更字文長、号天池。人物・花・虫・竹・石、超逸。行草書、尤精。嘗言吾書第一、詩二、文三、画四。識者許之。書仿米。其落欵、田水月。（詩）（佩）（明）（彙）（列）（史）（別）（綜）（志）。——同上。第六集、中(シ)、第四十一丁(ウ)。

㉙袁宏道　字仲郎(ママ)、一無学、又石公。万暦壬辰進士。官博士。宗道弟。工詩文及書。（列）（史）（綜）（文）（志）（名）。——同上。第七集(ヒ)、第三丁(オ)。

㉚陶望齢　字周望、号石簣。万暦己丑進士。官中允。有文名。（列）（史）（学）（文）（綜）（別）。——同上。第三集(タ)、第八丁(ウ)。

㉛銭謙益　字受之。号牧斎。万暦庚戌進士。官尚書兼学士。崇禎時、大宗伯。（紀）（外）。——同上。第七集(ヒ)、第三十六丁(ウ)。

㉜黄宗羲　字太冲。号梨洲。餘姚人。崇禎間諸生。（尺）（詩）（経）（賸）（正）。——『清人藝林姓名捷覧』（玉置環斎）。明治一〇石版。第四集(ク)、第十三丁(オ)。

㉝朱彝尊　字錫鬯。号竹垞。又醧舫。崇禎己巳生。康熙己丑卒。修一統志・明史列伝。（尺）（詩）（別）（舫）（賸）（経）（昭）（正）（彙）。——同上。第六集下(シ)、第一丁(ウ)。

㉞余嘗暇日与元贇老人共閲近代文士雷何思・鐘伯敬・徐文長等集、特愛袁中郎之霊心巧発、不藉古人自為詩為文焉。今玆九月之初、既夜正長而風遽冷、寂寂不睡、燈下擁被、独閲石公之集、読至別石簣詩、忽感近日老人将有尾陽之行矣。因效石公韻、綴狂斐十首、以擬陽関曲。但不知所以裁之、録呈藻鑒、宓希慈斤幸幸（後略）。——『元元唱和集』（陳元贇・元政）。寛文三版。元政詩第十六丁(ウ)。「送元贇老人之尾陽詩并引」。

㉟寛文壬寅季秋陽九後、余将帰謁尾陽君。草山元政上人廼倣袁石公別陶石簣十首之韻、以贈行。不佞即次其韻而酬焉。亦使他日好事者知有二元如昔日之有袁陶云。漫録於左、統丐慈斤。——同上。元贇、詩第三十二丁(オ)。

㊱（袁中郎）　（元政）　（元贇）
別石簣　別贇老　別政公
石簣何忍別　別而遇又別　暫別非久別

相知是相知　此別意難言　久暫心無異
知処難容舌　誰仮蘇張舌　豈仮叮嚀舌
一等是肝腸　昔不曾知君　我未曾別公
輪君生死切　今何思君切　先別情何切
烈火燎虚空　吾無文雅交　故知忘形交
火尽空不滅　無文道将滅　俗套自泯滅

其二　二　二

古今只四倫　君視吾何如　吾視師何如
大抵缺明友　君吾文章友　師吾方外友
誰識楚越人　世上名利客　万里為同調
万里為奇偶　総是非吾偶　唱和成奇偶
我腸寄君心　与君傾心腸　我吟寄師心
君心出我口　為君豈噤口　師吟出我口
寛同本自無　斥鷃相顧笑　于喝総天籟
異于何処有　大鵬遇希有　形骸復何有

其三　三　三

一葉随東風　邂逅遇尾城　昔傾蓋尾陽
飈泊已半載　至今已四載　屈指今四載
梯雪度深山　今年会洛陽　来僑山城邸

寒気鑠孤拐　来往労孤拐　訪師長柱栄
三入浄寺門　清談無点俗　揮塵忘道俗
寺僧笑狂騃　相忘如痴騃　謔浪若戇騃
欲得不相譏　君能言和語　方言不須訳
除非観自在　郷音舌尚在　却有頴舌在
是仙是凡人　久狎十知九　坐久咲相視
請君是揮解　旁人猶未解　眉語神自解

其四　四　四

君携我如頭　禄薄身自安　養賢忝升斗
我茫君若尾　免狼疐其尾　不是厖揺尾
不是西看山　薄禄猶為禍　自愧緇衣宜
便是東渉水　労君踰遠水　恩波浩海水
誰家薄福縁　遠水君莫辞　海水困潛虬
生此両狂子　不労奈稚子　風物悲遊子
受用能幾何　勝彼奔走士　拓落塵寰中
苦他雙脚底　終歳履無底　履穿東廓宜

其五　五　五

学道不学禅　学仏不学禅　形使心為役
談星不談義　解経不解義　礼教身服義

愛曲不愛音　読書不読文　五石不甘㝡(マヽ)
読書不読字　作詩不作字　十疋成走字
人天収不得　久忘人間世　命将地遷徙
賢智亦為祟　何物更為祟　老逼人為祟
不知何因縁　這般孟浪子　蘭向蕙辺開
偏得同臭味　亦有同臭味　自然同臭味
毎咲儒生禅　遂莫逆於心　蕙蘭苟相得
顛倒若狂酔　相視共如酔　不飲心先酔
除却袁中郎　唱和何所似　新詩各弄丸
天下尽児戯　童子竹馬戯　豈效宜僚戯

其六　六　六

南山有禽　水有滄溟　北有化鯤
其字曰希有　栖萬里鯨鯢　将図南為鵬
壮山有鳥　竹有嘉実　崗有梧桐
其名曰鳳凰　止千仞鳳凰　来和鳴鳳凰
両鳥排雲　鯢得其処　鳴鳳朝陽
扶霧入虚空　不羨人世界　声不仮金石
虚空莽莽　鳳得其食　遊鯤撃水
四頤絶稲粱　不願人膏粱　食不豢稲粱

下界豈無　天地之間　物於宇宙
七寸之粳米　物各有所主　貴能乎自立
争奈網羅　奈何曲己　何随世波
縝縝常高張　随人而翕張　靡而無主張

其七　七

不即凡不求聖　西天聖東土聖　忠恕聖慈悲聖
相依何覓性命　一知妙一知命　三乗法五十命
三入湖両易令　天下人聽両令　東西人各従令
無少長知名姓　吾孰承釈為姓　吾孔徒陳亢姓
湖上花作明証　公孰依孔為証　師妙法蓮華証
別時衰到時盛　孔若衰釈若盛　儒不衰釈不盛
後来期不敢問　公強立文昌祠　偈与詩実相竝
我好色公多病　雖老矣幸未病　豪興起病忘病

其八　八

帰去尋阿賓　公本大唐賓　久作扶桑客
阿賓亦可人　七十六老人　東瀛老旅人
公家廿一弟　吾少公卅六　伽陀邱風雅
超脱是其倫　才調況非倫　何得不同倫
天不孤生物　不知何夙世　夙世飛車国

有輈必有輪　合如車雙輪　今生合両輪
狂態誠可取　不忍暫時別　那堪暫分轍
其若頭上巾　作詩涙沾巾　回首涙沾巾

其九　九

気嘘為風　雲流為水　重々関山　遠遠洛水　三之日陸　一之夜水
人之小人　天之君子　子憶老親　親念幼子　子悲遠父　父懸愛子
鴨不能飛　蚓不能躍　別日猿鳴　帰時雀躍　声襲鴻哀　珠抛涙躍
梟哭非愁　鸞歌非楽　以別之哀　為帰之楽　驪歌慷慨　将悲作楽
無曰升天　天卑于淵　欲升天者　必先沈淵　生為魚者　潜必伏淵
無曰瞰淵　淵高于天　欲沈淵者　必先升天　生為鳶者　飛必戻天
即仏即聖　非儒非禅　要脱八苦　勿楽三禅　理之所在　不待参禅

其十　十

能再相従否　能早帰来否　能念吾児否
若駕相思車　綰之祝早帰　問我帰何時
当問白門柳　第三橋辺柳　寒鴉噪衰柳

――『梨雲館類定』袁中郎全集』(袁宏道)。元禄九版。巻之一

――『元元唱和集』元政詩。寛文三版。第十六丁㋒。「送」

――『元元唱和集』元賓詩。寛文三版。第三十二丁㋔。

第十二丁㋒。

「別石簣」。

㊲（袁中郎）

六籍信芻狗
三皇争紙上
猶竜以後人
漸漸陳伎倆
嘘気若雲烟
紅紫殊万状
醯鶏未発覆
甕裡天浩蕩
宿昔仮孔勢
自云鉄歩障
一聞至人言
垂頭色沮爽

――『梨雲館類定』袁中郎全集』（袁宏道）。元禄九版。巻之二

元賓老人之尾陽詩并引」。

（元政）

胆吹蘿蔔胆吹艾
蘿蔔太辛艾太烈
不辛不足解麪毒
不烈不足醒病骨
既辛既烈復何加
時用時置在得節
昨日槻村越人舎
三年艾兮十一穴
厳乎如逢屈突蓋
火勢入腸釈千結
今日草山老母堂
老母却為甘旨設
瀋滓如乳麪如絲
蕎麪由来風味別
体枯色麁味外味
何須重羅白似雪

（元賓）

紫花菈邈白葉艾
菈邈味辣艾性烈
辣能使麪毒不毒
烈起沈痾骨換骨
味辣性烈貴適宜
過辣過烈戒失節
前日槻村鮑婆艾
炙十一兪臓腑穴
赫焉如得薛孤延
鬪務霹靂駆積結
今朝草山老萱堂
香積特命旨饌設
土酥雋比天陀酥
蕎麪腰較斡麪別
気体冲和病輒已
那羨玄霜并絳雪

第六十七丁㋒。

「狂歌」。

胆吹蘿蔔胆吹艾　紫花菰遽白葉艾
病身不嫌辛且熱　羸軀頓除煩悩熱
不縁解毒与醒病　萱堂真活仏瑠璃
何由今日得一啜　与我清涼散一啜

――『元元唱和集』元政詩。寛文三版。雑体、第十五丁㋒。

――『元元唱和集』元贇詩。寛文三版。附、第三十二丁㋔。

〔参考文献〕

① 陳元贇之研究　小畑利三郎著。善鄰叢書第二輯。
② 陳元贇の研究　小松原濤著。雄山閣刊。
③ 日本藝能史六講　折口信夫著。三教書院刊。
④ 近世初期文壇の研究　小高敏郎著。明治書院刊。
⑤ 江戸時代初期に於ける性霊説　松下忠著。日本中国学会報第九集。
⑥ 張幼于論――伝記研究の視界から――　拙稿。書陵部紀要第二〇号。